

Volpone : or, The Fox

— Fool への賛歌

日 浅 和 枝

(I)

一幕一場冒頭で、貴族ヴォルポーネは寄食者モスカを相手に財宝を賛美し、財産目当てに愛情を装い贈物持参で群がってくる者達に期待を持たせて弄び競わせて更に贈物を持参させる面白さと喜びを述べる。その後召使達小人ナノ、両性有具者で道化アンドロジーノ、宦官カストローネが主人を喜ばせる為に掛合い万歳をする。その内容は、ピタゴラスの魂が様々に流転して今現在 fool のアンドロジーノの中に入っており、foolこそ「祝福された」生き物なのだからもはや他者の中へ移るつもりは無いと終わり、foolを称える歌が続く、その内容は「道化こそ人々の嫉妬や賞賛に値する唯一の種族である」から始まる fool の祝福された生活で、「彼には心配も悲しみも無く、自分も他人も陽気にし、その言行は総て真正で、彼の宝は道化棒と舌、真実を語っても虐殺を免れ、知恵が fool に付き添う時は食事と stool [腰掛：司教座の威光]^{注1}を手に入れる、fool になりたがらない者がいるだろうか？」

Free from care or sorrow-taking,
Selves and others merry making:
All they speak or do is sterling.

...

Tongue and bauble are his treasure.

...

And he speaks truth free from slaughter;

...

Hath his trencher and his stool,

When wit waits upon the fool.

O, who would not be

He, he, he?

(I i pp.407-8)

この fool の賛歌は何を意味するのか。すべての人間はこうした fool の祝福された幸せを知らず、愚かにも財宝を掻き集めて俗世の快樂を求め、嫉妬や憎しみを生む、それゆえに真の fool である。これがこの作品の中心テーマであり、それを示す手法は wit を駆使した disguise、feign である。

Disguise (de + guise) は本来「(服等) いつもの様子、態度、流儀をやめる」の意で、*O.E.D.* では1「習慣だった又地位等に適切と思えるものと異なったやり方で服を着る」初出1325頃、2「態度、流儀、服を他と異にする」初出1340、3「姿を変える；適切で自然な様子や姿から外観を変える」初出1393、4「他人の服又は特定の服を着て本性を隠す(現在の中心的意味)」初出1350頃、5「誤った方向に導くまたは欺く為に(物の)外観を変える」初出1398等で、「いつもの服装をやめる」から「本性を隠す為にある特定の服を着る」迄の過程は短い。

Feign は1「(物質に関して)型に入れて作る」初出1300以前、2「(物語、言い訳、申し立てを)考案する：(記録を)偽造する」初出1300以前、3「偽って描写する」初出1300以前、4「偽りの外観を身に付ける：隠す、振りをする」初出1393等で、この単語では「型に入れて作る」と「偽造する」は同時に使われている。

この作品中偽装しないのは fool を賛美した道化、宦官そして小人の三人である。小人はモスカと共に菓売りの宣伝演説台を作る作業員になるが、この変装は召使としての義務で彼自身の意図は無い。彼等三人は自ら fool であると自認している分だけ賢いのであり愚かな偽装はしない。また商人の誠実な妻シーリアと老紳士の息子ボナーリオも変装しない。この二人にとって「名誉、良心、謙虚、信仰」が最も大切であり、財宝獲得の為に名誉や良心を持っている振りをするのはそうした「徳」への冒涇である。

ヴォルポーネの遺産相続人になる期待で彼の一刻も早い死を願いつつ心配顔を装って見舞いに来る第一が弁護士ヴォルトーレ (Vulture = vulture ハゲワシ) で、骨董の皿を贈物に持参し、彼が唯一の相続人になれたのは「弁護士」としての才能であると聞き大喜びして帰る。

次に老紳士コルバッキオは金貨の袋を贈り、モスカから「ヴォルポーネを相続人にする遺言状を書き彼を元気付ければ彼はその返礼に貴方を相続人にするだろう」と聞き、息子ボナーリオを廃嫡してヴォルポーネを唯一の相続人にする遺言状を書く決意をし、大いなる期待で二十年も若返りヴォルポーネより長生きするつもりで帰っていく。財宝は若返りの魔力を持つ。

商人コルヴィノ (Colvino = corvidae カラス) は真珠とダイヤを贈る。モスカは「ヴォルポーネが貴方の名前を何度も繰り返すのを利用して貴方の名を遺言状の中に記入した」と彼を喜ばせ、ヴォルポーネを回復させる為に若い女が必要だと言う。コルヴィノはひどく嫉妬深く扱っていた妻シーリアを差し出す決意をし、拒絶する妻を連れてくる。しかし妻がヴォルポーネに陵辱される寸前にボナーリオに助け出されると、コルヴィノは自分の非の発覚を恐れて妻と若い男の密通を主張し、自らを「間抜け亭主」と告白する方を選ぶ。財宝を獲得する為には手段を選ばない。

彼等の外観のみの愛情と親切はヴォルポーネに完全に見抜かれているのに反し、彼等はヴォルポーネの外観を見抜けず、強欲で盲目になっている fools である。

三人の内最も皮肉られ嘲笑されるのが弁護士ヴォルトーレで、その「才能」とは比類ない機敏さでいかなる事件にも、原告と被告どちらにも応答し、どちらにも取れる忠告を与え、両方から料金を取る、それ程賢く、重々しく、混乱させる舌を持つ弁護士とは素晴らしい職業である (I i)。ヴォルポーネがこの才能を称えるのは彼自身の騙し方と大いに類似するからである。そしてヴォルポーネが若い人妻の陵辱を試みたという訴えをヴォルトーレはその弁舌で退け見事に黒を白と証明してヴォルポーネに無罪を勝ち取る (IV ii)。しかし、ヴォルポーネが死に、その相続人になったモスカから、「人間」と「事件を起こす悪意」がこの世に存在する限り二枚舌の弁護の才能で金貨は無限に手に入るゆえに他人の財産を欲しがらないだけの良心を持つようにと皮肉られる (V i)。役人に扮したヴォルポーネにも、弁護士の無限の収入と、弁護士を騙すなど人知の及ぶ所ではない筈だと皮肉られ、「富と知恵は常に共存すべき」ことを忠告される (V v)。このように傷付けられたヴォルトーレは、二度目の裁判で真相を暴露し、若い二人の密会を否定する書面を提出する。しかし人妻陵辱の暴露を恐れたヴォルポーネに再び操られ、取り付いた悪魔を振り払う芝居をして書面を否定する (V viii)。財宝は良心を欲望の餌食にする魔力を持つ。

(II)

貴族ヴォルポーネの本性はあらゆる事を可能にする金貨財宝を所有する喜びであるが、それ以上に彼が楽しむのは財宝を手に入れる巧妙な手法である。瀕死の病人を装う彼の相続人になろうと期待する人々が彼の死を望む本心を隠して愛情を装い、心配気に見舞い品を持って様子を見に来る、その様な人々を彼は競わせ弄び、彼等が帰るたびにベッドから飛び起きて哄笑する。彼のこの本性を知るのは小人達三人とモスカのみである。その為に彼は心身共に最大の偽装をし、訪問客に会う時は必ず部屋着と毛皮の襟巻き、ナイトキャップを着けて寝椅子に横たわり、咳をし、目も耳も機能を失い口も利けない程衰弱して「もう長くは無い」と呟く。そうした病人の姿を彼は常に維持しておかねばならず

I must

Maintain mine own shape still the same: (I i p.420)

身体的かつ精神的な変装を続ける。Shapeの初出は「特定の人、物に特徴的な目に見える形、外観」1000以前で、disguiseやguiseの意味での初出は1594である。

従って彼は外出する時必ず別の変装を考えねばならない。商人コルヴィノの美人妻シーリアを見に行く際(II i)、mountebank [特許を取った薬を公の場で売る薬屋] に変装する。この単語はイタリア語の命令文 *Monta in banco!* (Climb on the bench!) を元に16世紀後半から使われる語で、「聴衆を惹きつける為に高い台に上がって薬の宣伝をする者」であるが、薬の有効性の関連から [巧みな口上でいんちき薬を売る大道薬売り：ペテン師、いかさま師] の地口となり、このmountebankに変装することこそヴォルポーネに最も相応しい変装なのである。この変装がヴォルポーネとモスカどちらの考案かは明示されていないが、「外出するなら変装を」と言ったのはモスカであり、この薬売りの変装はモスカの案だと言える。

シーリアに一目惚れしたヴォルポーネは、彼女を手に入れる為にあらゆる手段を使えと宝庫の鍵をモスカに渡して恋の苦悩の救済をモスカに求め、モスカの策略で商人は妻シーリアを連行してくる。ヴォルポーネは欣喜雀躍してモスカを称える

Thou art mine honour, Mosca, and my pride,
My joy, my tickling, my delight! (III v p.444)

彼女と二人になった時ヴォルポーネの誘惑は種々の宝石、珍味そしてオヴィドから現在に至る迄の女神、王妃、貴婦人、高級娼婦、黒人女への変装等天上の目眩く楽しみである。シーリアが逃げ去り再び苦境に陥った彼は

I am unmask'd, unspirited, undone,
Betray'd to beggary, to infamy — (III v p.449)

と嘆くが、「仮面が剥れて本当の人格、隠していた真実が暴露する」の unmask'd は全く当を得て妙である。しかしこの失意の中、再びモスカの機転で弁護士ヴォルトーレが彼の弁護を引受けることになる。財宝は献身を生む魔力を持つ。

彼はモスカに二度救われた。裁判でヴォルポーネは再び寝椅子に横たわった瀕死の病人として運び込まれ、女の陵辱など全く不可能な無言の証人となって無罪を勝ち取ったものの、公の場でのこの偽装、偽証は彼にとっても身体が麻痺する程の緊張を要し、その恐怖を除く為にワインを必要とする程だ。彼は弁護士への謝礼の件でモスカと話し合うが、モスカの巧みな論法に誘導されて強欲者達全員を更に焦らし弄ぶことにする「お前の為に、お前の懇願で」

for thy sake, at thy entreaty,
I will begin, even now — to vex them all, (V i p.469)

何度も窮地を脱する策を講じてくれる献身的なモスカへの全面的な信頼である。従ってヴォルポーネが、自分の死去の噂を流しかつモスカを相続人にする遺言状を皆に見せ付ける計画を考えた時、モスカを相続人にする事への不安など皆無であり、その目的は偏に弁護士達の失望落胆を見て「比類ない大笑いのご馳走(a rare meal of laughter)」を味わうことであり、その為にはモスカの更なる協力が必要である。

彼の遺産を相続する望みが断たれて落胆する人々を尚且つ痛めつける為ヴォルポーネが二度目の外出をする時、法廷の役人に扮して法廷に入り込む。

彼が弁護士の状態を注目する中、弁護士が彼に欺かれた復讐として無罪の若い二人の前に跪いて許しを求め改悛の情を示した時、彼は自分の罠に掛かった事を悟る。これはヴォルポーネのシーリア陵辱という不名誉な試みの暴露へと通じるのである

To make a snare for mine own neck! and run
My head into it, wilfully! with laughter! (V vii p.482)

「しかも単なる悪ふざけから! (モスカを相続人にした) あの時俺の頭の中には悪魔がいたのだ」。しかし「偽装死」の計画を援助したモスカに償いをさせる必要がある

he must now
Help to sear up this vein, or we bleed dead.— (p.483)

だが小人達から「ご主人のモスカ様から遊んで来いと言われた」し、モスカが家の鍵を持っていると聞き、自分が更に苦境の深みにはまっている事を知る、「これは俺が思いついた計画なのに」今やモスカが主導権を握っている

What a vile wretch was I, that could not bear
My fortune soberly? (p.483)

彼はモスカの裏切りを非難するよりも自己の愚かさを呪う。弁護士に「富と知恵は共存するべきだ」と言った彼自身はその知恵を忘れ人を欺く笑いの狂気に耽っていた。今やっと冷静な真面目さに目を向け、そして今回は自分でこの難局を切り抜ける奇策を講じねばならない。モスカの目的は

His meaning may be truer than my fear. (p.483)

彼が恐れている以上に現実的なものかもしれないのだ。

今迄彼は弁護士や商人達を欺き嘲笑する具体的な工夫は総てモスカに委ね、その結果生じる歓喜の笑いのみを味わってきた。しかし今やこの窮地から抜け出す為にはモスカを当てには出来ず、自力で何か奇策を講じねばならない。

それは笑い興じる為などでなく、自己の名誉と財産に関わる問題なのである。彼が考え出した奇策とは、ヴォルポーネは死んだと信じている弁護士の頭を逆回転させてヴォルポーネは生きてると彼に囁き、再び相続人の希望を持たせて陵辱の罪を弁護させる事である

Unscrew my advocate, upon new hopes: (p.483)

この計画は上手く成功し、ヴォルポーネは再び心変わりした弁護士に取り付いた悪魔を祓う芝居をさせて、以前の後悔と書類は悪魔に唆されたものだったと判事達に信じ込ませる。今回ヴォルポーネは自力で難局を切り抜けた。「ヴォルポーネは死んだ」という嘘で人々の失望落胆を大笑いしたが、そこから生じた窮地を脱するのに「彼は生きてる」という事実とそこに由来する人々の欲望を巧みに利用した。「商人や弁護士達へのあまりの嘲笑は彼等を死なせてしまう」と言うモスカに彼は答えている、

O, my recovery shall recover all. (V i p.473)

しかしまだ相続人モスカの問題が残っている。

(III)

騙し騙されるキツネ、トンビ、カラス達の中で最も悪賢く、狡猾で、奸智に長けた者はヴォルポーネの寄食者(parasite)モスカである。Parasite(para共に、隣で+site 食物)はギリシャ語「他人の食卓で食べる者」、そして「(古代ギリシャで他人の食席に列して諂いや冗談を言うことを職業にした) 伴食者、太鼓持ち、おべっか使い」という職業で、ラテン語を経て*O.E.D.*での初出は1539「媚や諂いによって富者権力者のもてなし、保護、好意を得る者」である。

モスカは嘘を真実と思い込ませて騙し、他者の信頼を裏切って欺く。彼は追従、諂い、媚で弁護士、商人、老紳士各々に「貴方が唯一の相続人だ」と保証し、「その暁には私の事を忘れないで下さい」と自分の将来も頼み込む。彼等はモスカが財宝を守り財産目録を作るのは自分の為だと思い込んで彼を信用し、老紳士は身分の卑しいモスカの父親になる約束さえするし、商人は

彼を「友人、仲間、仕事の相棒」と呼び「総てを分ち合おう」と深い信頼を寄せる。

更にモスカは貴族であり主人のヴォルポーネさえ騙し欺く。彼は人々を欺いて財宝を獲得するという主人の喜びに奉仕し、その目的を果す為に事細かい策略を総て考案する。主人を喜ばせる唄を創作し、彼に病人用の衣服や油を着けさせ、ベッドに伏せる主人の眼前で人々を狡猾に扱い、贈物を受け取り、更なる贈物を約束させて追い返し、主人が外出する時は変装用の服を準備する。モスカが弁護士達をあしらう巧妙さにヴォルポーネは大いに笑い賞賛する

Excellent Mosca!

Come hither, let me kiss thee. (I i p.411)

good rascal, let me kiss thee: (p.415)

主人のこうした賛辞に対し、モスカは「教えられた通りに実行して御主人の御威光ある指示に従っているだけです」と従順を装う。

ヴォルポーネが大道薬売りに扮して商人の妻シーリアを見た結果商人に叩きのめされて帰宅し、シーリアへの想いに苦しむのを見たモスカは「良心と義務に掛けてもその苦悩を癒す為に最善を尽くす」と誓い、その目的達成の為に宝庫の鍵を渡される。そして主人の見事な薬売りの変装と宣伝演説を誉めた後、初めてヴォルポーネの前に傍白する

— and yet I would

Escape your epilogue. (II ii p.430)

この *your epilogue* は、美人妻を見ることには成功したが夫に打ちのめされた結末なのか、またはモスカによって最終的に財産を奪われる結末なのか。ギリシャ語の *epilogue* 「スピーチの締め括り」から、*O.E.D.* での初出は1564 「文学作品の結論部分、付録」で、「芝居の結末の後役者の一人により観客に向けられるスピーチ又は短い詩」の初出が1590である。従って *epilogue* は単に一つのプロットの結末ではない。モスカは早くもここ二幕二場の終りで、宝庫の鍵を手にし最終的には財産を全て手に入れる意図を仄めかしているの

である。

モスカのこの意図を基に彼が弁護士や商人達を扱う様子を再考するとその意図が更に明白になる。彼は、第一の訪問者弁護士が外で待たされてる間何を考えているかを想像する「ヴォルポーネが今日死ねば、骨董皿が最後の贈物となって大きな収益をもたらし、豪華な衣服や低くお辞儀する人々、偉大なる弁護士の称号等を手に入れられるのだ」。これが富の効用でありモスカ本人の望みでもある。彼は主人が貪欲な人間達を惑わして更に財産を獲得する事を望む、自分自身の為に。彼は主人の指示に従っているだけだと言うのだが、どこまでがヴォルポーネの指示なのか。彼は贈物を主人の手に持たせ主人の眼前で「弁護士の貴方が唯一の相続人です、その理由は弁護士という価値ある職業で、主人はいつもその職の人を賞賛しています」と言う。またこの場ではヴォルポーネと弁護士の直接の会話も多く、弁護士職への賛辞もモスカは主人の言葉通りに繰り返しているといえる。しかし次の訪問者のノックに、彼は弁護士に急用で来た振りをするよう指示し、いつ遺言状の写しを見たいか訊く等の暗示で期待を持たせて帰らせる。ヴォルポーネの *Excellent Mosca!* はこうした彼の咄嗟の機転への賛辞である。

金貨を持参した老紳士の間ではヴォルポーネと老紳士との直接の対話は無い。モスカの「主人を唯一の相続人にする遺言状を書くことで主人の相続人になる」計画に同意して老紳士がそれを実行する為に帰っていくや、ベッドから飛び起きて大笑いする二人

Mos. you know this hope

Is such a bait, it covers any hook.

Volp. O, but thy working, and thy placing it!

I cannot hold; good rascal, let me kiss thee:

I never knew thee in so rare a humour. (I i pp.415-6)

ヴォルポーネも相続の期待が大きな餌だとは知っている。しかしモスカによるこの餌を使っただけの工作法、その配置法は驚くべきもので、モスカがそのような事をする比類ない気質を持っているとは知らなかった。老紳士にヴォルポーネを相続人とする遺言状を書かせる策は完全にモスカ一人の考案である。彼はただ主人の指示に従い主人の財産を増やしているのではない。それは自分自身の為なのである。

モスカが主人の恋を成就させる約束をしつつ、主人の信頼を裏切り欺く意図を傍白した(II ii)あと、彼はシーリアを手に入れる仕事に取掛かる(II iii)。妻に対してひどく嫉妬深い商人に妻をヴォルポーネに提供しようと決意させるのは財産への強欲さであり、モスカは自分の娘を差し出そうと言う医師が居ると話して彼の競争心を煽りたて、商人は娘も妻も同じだという結論に達する。

次の場(III i)の冒頭はモスカの独白で、商人への策謀計画そのものをモスカが楽しんでいる事を示している。彼は自分自身に恋をする程自らの機知に惚れ込み自画自賛して言う「この卓越した優雅な悪党は、矢や星や燕の様に自在に飛び回り、どんな状況にも即座に対応出来る、それは学問に依るのではなく生来の才能なのだ」。その才能を更に発揮すべく、彼は老紳士が遺言状から排除した息子ボナーリオにそれを告げる。ボナーリオは本能的にモスカの卑しさを嫌悪するがモスカがそれを聞いて泣くのを見て後悔し、また父の非道を疑う為モスカは彼を遺言状が取引される現場へ連れて行く。この策略もヴォルポーネの関与しないモスカ一人の計画であることは、彼が主人に遺言状を持参した老紳士の来訪を告げ「彼が帰ったらもっと多くの事を話してあげます」(III ii)と言う台詞から判る。モスカは自分の計画を楽しんでいる。

しかしこの計画は狂い、予定より早く商人がシーリアを連れて来たので、ボナーリオを別の部屋で待たせざるを得ない。ヴォルポーネが拒絶するシーリアに暴力で襲いかかった時、ボナーリオが飛び込んできてヴォルポーネを「強姦者、好色な豚、詐欺師」と罵りモスカにも傷を負わせてシーリアを連れて逃げ去る。ヴォルポーネの悲嘆は当然ながら、モスカは自分の過ちで自分の命や気力と共に自分の hopes も窮地に追い込んでしまったことを嘆く。そこへ老紳士が遺言状を持参するが、その話を弁護士に立ち聞きされてしまったモスカは再び素早い機転で、廃嫡された息子が父親に暴力を振った事、息子が逮捕されれば弁護士には二重の期待が生じる事、そしてボナーリオとシーリアが密通している事を即刻捏造して主人の罪を庇い、ここでもモスカの計略は成功して彼の hopes も蘇る。裁判での弁護士の弁舌は迫力はあるにしろその内容はモスカが捏造した話の繰り返しであり、ヴォルポーネは無罪、商人も自ら間抜け亭主と公言することになったものの妻を売った事は隠しおさせた結果、ボナーリオとシーリアは有罪となる(IV ii)。

ヴォルポーネとモスカは大いに安堵し、主人は有能な召使を褒め上げる

Exquisite Mosca!

…

Thou hast play'd thy prize, my precious Mosca. (V i p.467)

そして争い合っていた者達がどうして裁判で嘘の弁護に協力したのか問うヴォルポーネにモスカは答える「あまりにも期待が大きいと失敗など目に入らなくなる、金貨は奇形さえ美しくする薬、世界中を寛大、若さ、美へと造り替える巨大な力なのです。」

しかしモスカは最終目的へと進まねばならない。彼は自分の考案した策略を自画自賛し、裁判の結果は最高の傑作でこれ以上の成功は考えられのでこの一件でもう遊びを止める必要性を説く一方で、弁護士の仕事ぶりについて

Now, so truth help me, I must needs say this, sir,
And out of conscience for your advocate,
He has taken pains, in faith, sir, and deserv'd,
In my poor judgement, I speak it under favour,
Not to contrary you, sir, very richly —
Well — to be cozen'd. (V i p.468)

真実、良心等を前提として、「私の貧弱な判断」、「好意から」、「貴方に反対するのではなく」等と謙遜を装いつつ、弁護士は大変苦勞したから「受ける価値がある」、「十分に」と言っておいて最後に「欺いてやるだけの」と論じていく。モスカの論術は生来の才能であり彼の計画を推進していく上で大きな効果を生む。彼を全面的に信頼しているヴォルポーネは簡単に同意する

for thy sake, at thy entreaty,
I will begin, even now — to vex them all, (V i p.469)

その目的は「お前の為」より、自分の死去の流布により期待で集まってくる者達にモスカを相続人にした遺言状を見せ、彼らの落胆と失望をカーテンの陰から見て得られる「大笑い」の為である。

主人の部屋着を着て財産目録の整理をするモスカは、自分の名前の入った遺言状を期待で集まった者達に見せ、順次その貪欲を叱責して追い返す。皆

を徹底的に嘲り非難して失望と屈辱の奈落の底へ突き落すこの芝居はモスカのものであり、カーテンの陰のヴォルポーネは、

O, my fine devil!

...

Rare Mosca! how his villainy becomes him! (V i p.472)

Excellent varlet! (p.473)

と感嘆し、最後の一人が帰っていくとカーテンから飛び出してきて叫ぶ

My witty mischief,

Let me embrace thee. O that I could now

Transform thee to a Venus! (V i p.473)

ヴォルポーネは今迄モスカの機知を誉め何度も let me kiss thee と繰り返してきたが、今や embrace (異性との抱擁) との関係で a Venus (美女) となり、モスカは完全に腹心の部下以上となる。さらに彼は召使のモスカに部屋着から格上げして紳士の服を着せ、紳士の服が召使によく似合うのを見てモスカが紳士の生れではないことを残念がりさえする。今やモスカは彼にとって精神的な同輩となっている。そしてここでもヴォルポーネは「笑い」を楽しむチャンスを逃さず、人々を更に苦しめる為に紳士のモスカを町に行かせ。紳士姿を誉める主人に対しモスカの第二の傍白がある

If I hold

My made one, 'twill be well. (V iii p.477)

偽装紳士のままでいれば上手くいく、主人の遺言状には相続人として自分の名前が記入され、複数の人がそれを見ているのだから。

ヴォルポーネも変装してハゲタカやカラスを嘲笑しに出かけた後、モスカは第二の独白をする

My Fox

Is out of his hole, and ere he shall re-enter,
I'll make him languish in his borrow'd case,
Except he come to composition with me. (V iii p.477)

モスカにとって、今こそヴォルポーネが死んだという偽証を利用して彼の力を抜き取り弱めて自分と妥協させる、即ち狐を捕らえるチャンスである。ヴォルポーネは現実に死ぬ以前に死んでいる必要があるのだから、モスカは彼を埋葬してしまうことも彼から利益を得ることも出来る

I am his heir,
And so will keep me, till he share at least.
To cozen him of all, were but a cheat
Well placed; (V iii pp.477-8)

他ならぬ狐を欺くことは完全に妥当な欺きで、それを罪と解釈する人は誰も居ない、これこそ Fox-trap なのだ。ここでやっとモスカの期待は現実味を帯びてくる。

最終的にヴォルポーネとモスカの対決は、ヴォルポーネの即座の決意で決着する。紳士のモスカはボナーリオとシーリアを裁く法廷で丁重に迎えられ、法廷役人に扮したヴォルポーネの「ヴォルポーネは生きている」という主張を無視し、ヴォルポーネは偽証罪で逮捕される。かつて彼は

The Fox fares ever best when he is curst. (V i p.474)

と、人々の呪いを計略成功の結果と見做して喜んで受け入れていたが、逮捕されるや「鞭打たれ、総てを失うとは！ 自白しても同じことだ」と傍白し

I must be resolute:
The Fox shall here uncase. (V viii p.486)

と逮捕から7行で決断し、変装を脱ぎ捨て総てを自白する。ボナーリオと

シリアの無罪が証され、弁護士、老紳士、商人がそれぞれ罰を受けるが、ヴォルポーネの罰は病人を装って人々を欺いたゆえに全財産を病院に渡し、病気になる迄牢獄に繋がれる。モスカは主人の悪事を召使根性で実行し、法廷を侮辱し、その生れでもないのに紳士の服を着ている咎で鞭打ちと無期懲役になる。それに感謝するヴォルポーネにモスカは「その残忍な性に破滅が降りかかるよう」呪いつつ引かれて行く。

判事の一人はモスカを「陰謀者 (plotter) ではないにしろ、使い走りの実行者だ」と言う。確かにヴォルポーネの貪欲と人々への嘲笑が根源的な悪の原動力であるが、モスカはそのヴォルポーネを欺く陰謀をめぐらし、諂いと追従、媚によって財産獲得にほぼ成功したのであり、彼こそ plotter だと言える。しかしモスカはヴォルポーネが徹底的に強欲な性でありそれゆえに総てを失う覚悟で事実を暴露するとは考えておらず、自画自賛した「臨機応変の才」も主人の本質を見抜くことは出来なかった。富と知恵は常に共存すべきなのである。

(IV)

ヴォルポーネを中心とした強欲な者達のプロットと一見関連性が無いように思われるのが、英国のナイトで政治家気取りのサー・ポリティック・ウッド-ビ (Sir Politick Would-Be) とその妻、そして英国紳士で旅行者ペリグリン (Peregrine = 放浪者) の三人である。ペリグリンはウッド-ビが、カラスが王の船に巣を作ったことを凶兆と見做し、大道葉売りが殴られるのを国家の陰謀と解釈し、スパイの情報伝達法を諷刺顔で話すのを聞いて、すぐに彼の無知を見抜き、「楽しむ為に for my mirth」彼と付き合うが(II i)、それはヴォルポーネの「爆発的笑い」ではない。ウッド-ビ夫人は一流の貴婦人を気取って淑女の嗜みを侍女達に説教するが、ヴォルポーネを訪問して仮病の彼を本物の病人にしてしまう程音楽、絵画、古典の知識を饒舌にひけらかし、女性の嗜みは「沈黙」だと彼に皮肉られる(III ii)。モスカがこの苦境から主人を救う為の嘘「サー・ウッド-ビが高級娼婦とゴンドラに乗っていた」という話に彼女は町へ飛び出していき、夫と共にいたペリグリンを男装した娼婦と思って二人を罵る。ペリグリンが男性だと判った時彼女は大いに恐縮し謝罪して「ヴェニスに滞在するなら私をご用立てください (please you to use me)」と繰り返す。この無教養な表現にペリグリンは、夫が妻を他人にあてがうと

は「政治家気取りではなく狡賢い取り持ち(sir Politick Bawd)だ」と怒って仕返しを考える(IV i)。ペリグリンは商人に変装し、かつてウッド-ビが「ヴェニスをトルコに売ることも出来る」と豪語したことを種に、それを知った議員達が彼を逮捕しに来ると脅し、ウッド-ビは亀の甲羅の中に隠れて床を這い回ることになり、この屈辱に彼はヴェニスを立ち去らざるを得ない。

サー・ウッド-ビ夫妻は意図的に人を欺いているのではない。夫が妻について説明する「妻の特異な気質(peculiar humour)(II i)」はそのまま夫にも該当し、政治家を気取ること、淑女を気取ることが彼等のhumourである。夫人のヴォルポーネ訪問に関しても、彼の病気を治癒する為の種々の薬はヴォルポーネの大道薬売りとの表面的な関連のみで、夫人が彼の相続人になろうという意図は明確には表現されていない。裁判で夫人がシーリアを夫と一緒に居た娼婦だ言う証言もモスカの口車に乗せられ、また夫の浮気を懲らしめる為であり、ヴォルポーネは彼女の証言ゆえに無罪になったのだから彼女を相続人の筆頭に置くだろうと言うモスカに、彼女は一言「指示に従う」と言うだけである(IV ii)。またペリグリンが商人に扮してウッド-ビを騙すのも単に彼を脅して当地を立ち退かせ、彼の奇抜な思考を事実として「旅行記」に記録する為である。この三人の欺きには強欲さゆえの意図的悪意は無く、むしろ無教養や愚かさ、揶揄からのもので、ヴォルポーネを中心とする者達の欺瞞と対照をなす。

(結)

少数の人物以外は皆悪意からまたは愚かさから変装し互いに騙し騙され、結果的に全員その正体が暴かれて罰を受け、愚者であることを証明する。ラテン語 *foliis* は「(雄牛等の)ほえ声、(人の)怒鳴り声」、また「ふいご、頭の空っぽな人、馬鹿」で、ここから来た *fool* は *O.E.D.* で「判断や感覚に欠陥のある人、馬鹿者」の初出が1275頃、そして「職業的道化」の初出は1370? とある。

この作品で *fool* 「道化」のアンドロジーノは *hermaphrodite* 「両性有具者」となっている。*Hermaphroditus* は *Hermes* (神々の使者: 商業、弁舌、窃盗、旅行者等の守護神) と *Aphrodite* (愛と美の女神) の息子で、サルマキスの泉(この水を飲んだ男は女に変る)に住む妖精に恋され、彼女の祈りによって一体となり、男女両性を備えるようになったギリシャ神話を語源としてい

るが、その両性を持つアンドロジーンが「今のままで居たい」のは両性から得られる快樂の為ではない。その様な快樂は「陳腐であり、もう放棄しており」、foolこそ心配も無く陽気になり、真実を語って罰せられず、知恵が伴えば榮光を手に入れる、「祝福された唯一の生き物」だからである。人々を欺いて巨万の財宝を所有し、ピタゴラスの魂の変転をし (transmigration、translation、variation、reformation、change)、王侯貴族から知恵者、女衞、奴隸、美青年等様々に変身しあらゆる快樂を経験しようと、最終的に辿り着くのは fool なのである。

使用テキスト

Ben Jonson: *Volpone: or, The Fox. Ben Jonson The Complete Plays Vol.1, with Introduction*
by Felix E. Schelling. Everyman's Library. Dent, 1964.

注1 地口は [a : b] で表記。